

42TH PERCUSSION ENSEMBLE REGULAR CONCERT

2021年11月6日(土)

前田ホール

Open 15:15 / Start 16:00

■新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い■

感染しないために。感染させないために。

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。

皆さまが安心して楽しめるように。

- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。

混雑環境の緩和のために。

- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・休憩時・終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。

万が一集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者情報を提供する場合がございます。

本日は「第42回打楽器アンサンブル定期演奏会」にお運びくださり誠にありがとうございます。
今年も無事に演奏会を開催させて頂けたこと、関係者各位に深く感謝申し上げます。

打てば響く打楽器ですが、その世界は大変奥深く無限の表現領域をもっています。

遙か昔、時代・国・民族・文化によって異なる打楽器が生まれ今日まで大きな進化を遂げてきました。
本日は、打楽器アンサンブルの小品2曲に加え、日本の伝統芸能で長い歴史を持つ和太鼓、ドラム缶
で出来たスティールパン、観ても楽しめるマーチングパーカッション、インドネシアの民族楽器ガムラン、
アングルンなど多彩な演目が並びますが、全て学生たちが自ら考え作り上げたものばかりです。

そしてメインの打楽器オーケストラでは、伊藤康英先生にタクトを執っていただきます。先生は作曲家で
ありながら打楽器への造形も深いので、学生たちの可能性を存分に引き出していただけると期待が高
まります。

私はまだ責任者2年目ですが、打楽器コースが誇る先生方と共に、本学独自ともいえる打楽器アンサン
ブルの形態をさらに発展したものにしていけるよう誠心誠意努めてまいりますので、今後ともご指導ご
鞭撻を賜われますと幸いです。

不安定な情勢と制約のなか、今日まで学生たちは一丸となり自分たちにしか出せない音を追及し、真
摯に取り組んでまいりました。その熱意と思いが皆さまの心に共鳴することを心より願っております。

打楽器コース 統括教授
石井喜久子

本日は、お忙しい中洗足学園音楽大学打楽器コース「第42回打楽器アンサンブル定期演奏会」にお越しいた
だき誠にありがとうございます。

昨年に引き続き席数を制限し、関係者のみのご招待という形での開催ではありますが、無事にこの伝統ある演
奏会を今年も紡ぐことができとても嬉しく思っております。

私たちは、洗足の学生のうちにしか出来ないような、また今の洗足の打楽器コースだからこそ出来る演奏会を目
指して、今日まで励んで参りました。

私たちの強みを色濃く出したプログラムとなっており、打楽器だけの演奏会ではありますが、皆様に打楽器の広
さとそれぞれの色を感じ取って頂けたら幸いです。

最後になりましたが、関係者のみなさまにご支援、ご協力を賜り、演奏会を開かせていただく運びとなりましたこ
とを、心より感謝申し上げます。それではどうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

洗足学園音楽大学打楽器コース インспекター
高橋芽生(学部4年)

本日はご来場頂き誠にありがとうございます。

皆様のお力添えのおかげで、無事にこの日を迎えることができ、心より感謝申し上げます。

今年度の演奏会では、アンサンブルの更なる可能性を追求し、各曲、例年よりも大きな編成で挑戦致しました。
学生一同、皆様の心に残るよう感謝の気持ちを込めて演奏致します。

ご来場のお客様、配信をご覧になれるお客様も、どうぞ最後までお楽しみください。

洗足学園音楽大学打楽器コース 演奏会責任者
田代万莉子(学部3年)

PROGRAM

～GREETING CONCERT～ ガムランアンサンブル

- **Carabalen** -チョコバレン-
- **Gugur Gnung** -ググールグヌン-
- **Kopi Susu** -コピスス-
- **Sapu Jagad** -サブシャガ-
- **Udan Mas** -ウダンマス-

【第1部】

和太鼓と打楽器アンサンブルのための 鼓神Ⅱ / 和田薫

EYE / 田中遥己

STEELBAND PARADISE / Ray Holman

～休憩～

【第2部】

The Cruel Waters / Adam Silverman

「マ・メール・ロワ」より「妖精の園」 / ジョセフ・モーリス・ラヴェル(編曲:佐竹絵磨)

MAG7 Rhapsody No. 1 / Michael Burritt

～休憩～

【第3部】

ラ・ヴァルス 管弦楽のための舞踏詩 / モーリス・ラヴェル

ガムランアンサンブル

- Carabalen -チョコバレン- ●Gugur Gnung -ググールグヌン- ●Kopi Susu -コピスス-
●Sapu Jagad -サブシャガ- ●Udan Mas -ウダンマス-

Player ~サラスワティ~

池本羽奈
森奈那子
田代万莉子
前田玲弥
小川友李江
椎名萌

濱出美咲
吉野萌
栃下紗奈
阿南杏佳
川崎友仁
廣木太陽

松井菜々子
大石水紀
中田実紅
江口和輝
小山梓
宗像桃子

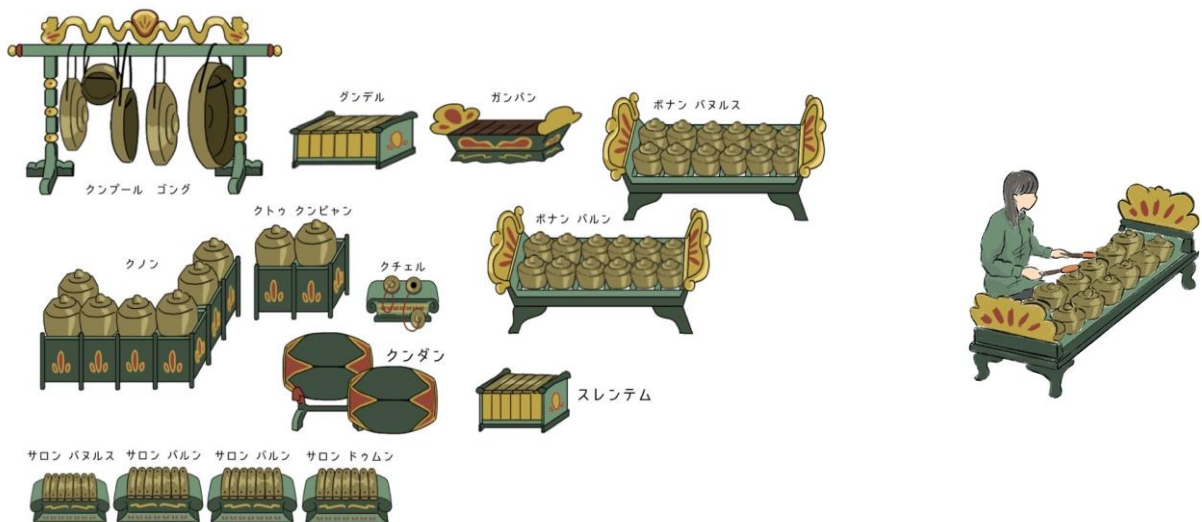
村山みなみ
小野寺俊介
福本奏音



PROGRAM NOTES

ガムランは、東南アジアのインドネシアで行われている様々な銅鑼や鍵盤打楽器による合奏の民族音楽の総称であり、バリ・ジャワ(中東ジャワ)など地域ごとに色々な演奏スタイルがある。本日演奏するジャワのガムランは、中東ジャワの王宮を中心に発達したもので、ゆったりとした流れと優雅な響きが特徴だ。現代では王宮の儀式の他、結婚式のどの儀礼の場、舞踊や影絵芝居の伴奏として演奏されている。

濱出美咲



和太鼓アンサンブル

和太鼓と打楽器アンサンブルのための 鼓神 II / 和田薫

Player ~鼓弾~

大太鼓	高橋芽生(独奏組太鼓)	佐竹絵磨	岡澤七海
桶締太鼓	森奈那子	江口和輝	
締太鼓	榎本耀	柴田瑠美	
田楽太鼓	池本羽奈	近藤花音	中田実紅 佐山果凜
Timp.	馬島啓		
Perc.1	横木秀真		
Perc.2	福本奏音		
Perc.3	小野寺俊介		
Perc.4	栃下紗奈		



PROGRAM NOTES

『犬夜叉』『ゲゲゲの鬼太郎』などの作中音楽などで知られる日本を代表する作曲家、和田薫による作品。

2008年5月24日、林英哲氏、英哲風雲の会、中谷満主宰パーカッションアンサンブル「シュレーゲル」によって初演された。

この曲の基となっている「協奏3章 鼓神 和太鼓と吹奏楽のための」は、同年1月13日に洗足学園音楽大学芸術監督秋山和慶指揮「S ウインドオーケストラ」、林英哲氏による和太鼓独奏、当時の鼓弾部員によって初演されているが、そのリハーサル過程で和太鼓と打楽器アンサンブルでも演奏出来ないかとの構想が持ち上がり、作曲に至った。

太鼓の歴史は深くその起源や役割は諸説あるが、古来より神との交信や祈りとして人々の生活に寄り添ってきた。

今回使用する楽器を例に上げる。平安時代、田植えの際に豊作を願い、太鼓を肩から背負って舞う「田楽躍」が始まった。

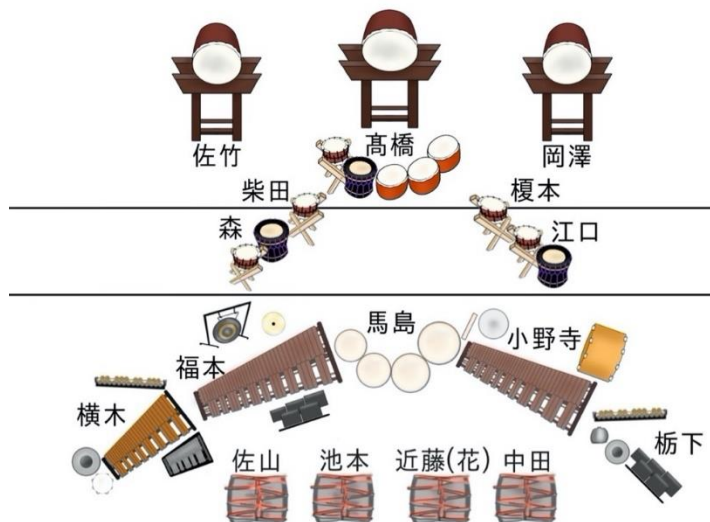
「団扇太鼓」は仏教の法具として、日蓮宗・法華宗などで古くから使用されている。戦後、長野県の御諏訪太鼓により考案された「組太鼓」はジャズドラムを参考にしており、現代では主流になっている。

太鼓は現代も変わらず伝統文化として守られつつ、今や芸術・音楽へと進化した。その進化は、留まるところを知らない。

田楽太鼓、団扇太鼓、組太鼓を始めとした和太鼓群、そこに西洋楽器群が交わり、華やかに、そして強かに演出する。

独奏の組太鼓とティンパニの、二柱の神の物語を16人で彩る。

森奈那子



マーチング

EYE / 田中遥己

Player

眞塩怜央奈
田中遥己
千保木楽斗



PROGRAM NOTES

音楽表現に於いてマーチングパーカッションという媒体を使う意味を考えた時、「視覚」の存在は切っても切り離せない関係にある。

今回はそのような新しい感覚にフォーカスしたショーを制作した。

普段とは少し違った音楽の形をお楽しみいただければ幸いである。

田中遥己

田中



眞塩



千保木



スティーロパンアンサンブル

STEELBAND PARADISE / Ray Holman

Player ~Pan Note Paradise~

High Tenor	北山絢萌 田代万莉子 前田怜弥
Low Tenor	村山みなみ 大塚愛美 星陽華
Double Tenor	天谷芽生 椎名萌
Double Second	大石水紀 中田実紅
Triple Cello	高橋芽生 川崎友仁
Guitar	栃下紗奈
Tenor Bass	福本奏音
Six Bass	松井菜々子 池本羽奈
Drums	鈴木皓大
Percussion	江原和紀 山野智広 渡邊拓斗

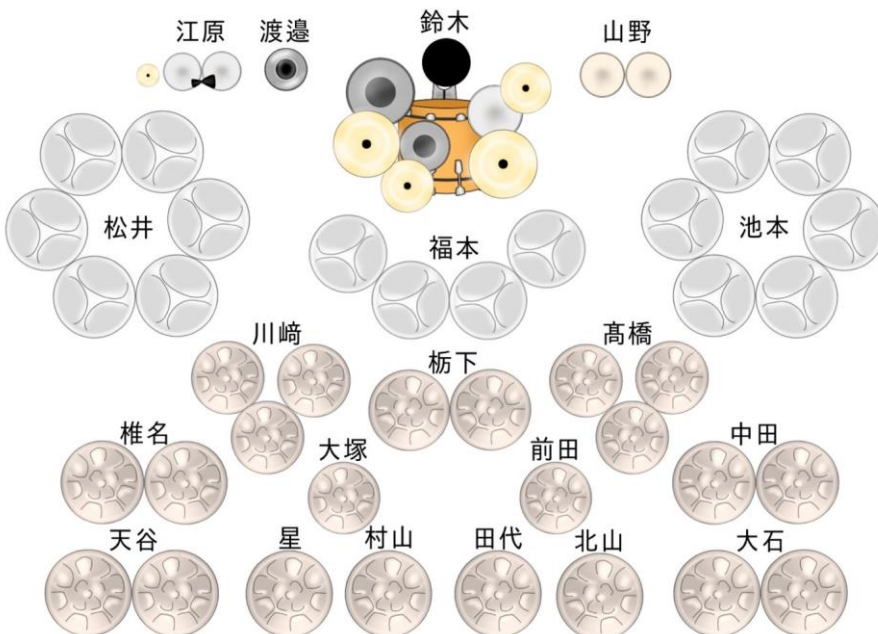


PROGRAM NOTES

Ray Holman は 1944 年にトリニダードの島で生まれ、幼少期に Invaders Steeldrum Orchestra でスティーロパンを始め、数年後バンドの為に、作曲家として豊富なアイデアをだし、アレンジを数多く始めた。

この作品は、動的な変化を除いて速いテンポ、音量、高いエネルギーで演奏する曲であり、規律と努力から生まれる芸術性を示している。

松井菜々子



マリンバアンサンブル

The Cruel Waters / Adam Silverman

Player

吉野萌
北野佑芽
高橋芽生



PROGRAM NOTES

「残酷な水域」

この曲のタイトルを直訳したものだ。

作曲者によると、乱流環境がこの曲の絶え間ない重なりと連動を表している。

流れるアルペジオと膨らんだり縮んだりするトレモロから生まれる音は、海の嵐の中でうねる波打つ水を思い起こさせる…と。

この曲は、環境問題と繋がりがあるとも感じられる。

ダークなフレーズに時々現れる光は、果たして自然的な美しさなのか人工的な美しさなのか。

16部音符が主として進んでいくこの曲は、やがて激しさを増し、不協和音を感じて私達は歌う。

他のプログラムとは少し違う緊張感を味わいながら、綺麗だったはずの水域が今どんなに残酷な状態かを、3つのマリンバで表現する。

吉野萌



アンクルンアンサンブル

「マ・メール・ロワ」より「妖精の園」／Joseph Maurice Ravel（編曲:佐竹絵磨）

Player

<アンクルンⅠ>

佐竹絵磨 高橋芽生 林英希 横木秀真
阿南杏佳 小川友季江 熊谷彩夏

<アンクルンⅡ>

池本羽奈 村山みなみ 吉野萌
小野寺俊介 栃下紗奈 渡邊拓斗 渡辺優生

<マリンバ>

北野佑芽 吉野萌 前田伶弥



PROGRAM NOTES

作曲者のモーリス・ラヴェルはお気に入りのフランスのおとぎ話を選び、ゴデブスキーの子供たちへの贈り物として4手連弾の「マ・メール・ロワ」を描いた。組曲のタイトルは、シャルル・ペローの「Contes de ma mère l'oye」から引用されたものである。

今回演奏する「妖精の園」は風格のあるサラバンドでほとんど白鍵で書かれており、ゆっくりとしたテンポで荘厳な曲調である。「眠りの森の美女のパヴァーヌ」と同じくシャルル・ペローの「眠れる森の美女」から眠りに関する王女が王子の口づけで目を覚ますシーンを描いている。

「マ・メール・ロワ」にはピアノの4手連弾によるオリジナルの組曲、オーケストラ版、前奏曲や複数の間奏曲などを追加したバレエ版の3つのバージョンがある。今回はピアノ連弾版よりアンクルンとマリンバによるアンサンブルに編曲してお送りする。

佐竹絵磨



高橋 小川 横木 佐竹 林(英) 熊谷 阿南 渡辺

池本

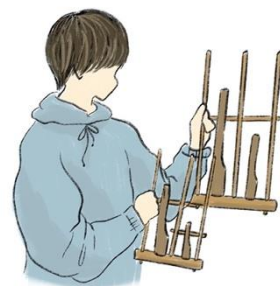
村山

栃下

小野寺

渡邊

吉野



打楽器アンサンブル

MAG7 Rhapsody No. 1 / Michael Burritt

Player

Marimba 1A	近藤花音
Marimba 1B	田代万莉子
Marimba 2A	江原和紀
Marimba 2B	松井菜々子
Vibraphone 1	福光真由
Vibraphone 2	池本羽奈
Percussion	近藤寛斗



PROGRAM NOTES

曲名の「MAG7」とは“The Magnificent Seven”（最高に素晴らしい7人）という言葉をもじった造語である。曲は主に2つの大きな要素から作られている。

1つ目は、冒頭のマリンバのソロによって繰り返し提示される高速な16分音符のモチーフである。このモチーフは、7人全員が楽器や調性を変えてソロとして提示されたり、フーガのように使用されたりと様々に形を変えて現れる。

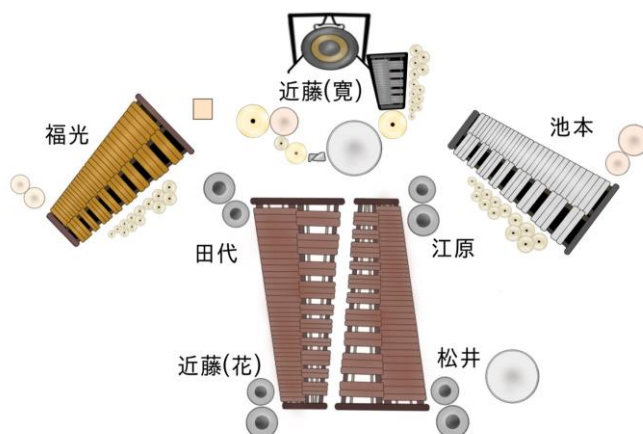
2つ目は、“5”という数字である。

曲の始まりのセクションでは「(※)ヘミオラ」で表される5連符が、場面展開や転調のきっかけで用いられたり変拍子で進行していく中、5拍子の動きをする奏者が居たりと“5”にまつわる作曲技法が多く使われている。

各モチーフがラプソディックに変化していく様や、アンサンブルが視覚的にも楽しめる作品となっている。疾走感溢れるサウンドをお楽しみ頂きたい。

近藤花音

(※)ヘミオラとは、いわゆる「ポリリズム」の一種であり、例えば3拍子の曲で2小節をまとめてそれを3つの拍に分けて大きな3拍子のようにすることをいう。



マリンバオーケストラ

ラ・ヴァルス 管弦楽のための舞踏詩／Joseph Maurice Ravel

【指揮】

伊藤康英(本学教授)

【Orchestra】

Concertmaster	近藤花音					
Marimba1	小野寺俊介	佐山果凜	小川友李江			
Marimba2	北野佑芽	田代万莉子	前田伶弥	廣木太陽		
Marimba3	福本奏音	大塚愛美	川崎友仁	渡邊拓斗	松田有平	
Marimba4	濱出美咲	林拓海	北山絢萌	阿南杏佳	相川拓音	
Marimba5	福光真由	中田実紅	古橋優実	柴田瑠美	竹内夏美	
Marimba6	松井菜々子	榎本耀	林英希	宗像桃子	廣瀬歌菜	
Marimba7	佐竹絵磨	櫻井秀悠	横木秀真	大野紗楽		
Marimba8	高橋芽生	村山みなみ	大石水紀	熊谷彩夏	吉田創	
Vibraphone1	池本羽奈	入江美咲				
Vibraphone2	栃下紗奈	田村夢佑壘				
Vibraphone3	小山梓	三好花梨				
Xylophone1	吉野萌	渡邊歩紀				
Xylophone2	金正紗也加					
Glockenspiel1	杉本裕香					
Glockenspiel2	林まど子					
Chime	小栗栖未久	椎名萌				
Timpani	馬島啓					
Percussion	森奈那子	近藤寛斗	江原和紀	星陽華	山野智広	千保木楽斗
	岡澤七海	八木優弥	宮下真凜			
バンド Chime	加藤海夏太	古仲咲希	内田光太郎			
バンド Snare drum	渡辺優生	鏑木舜裕				
バンド Bass drum	江口和輝	浅井惇				

マリンバオーケストラ

PROGRAM NOTES

ラヴェル (Joseph Maurice Ravel) はフランスの作曲家。「ラ・ヴァルス」は1920年に書かれた。

ラヴェル自身によって2台ピアノと独奏ピアノ版も編曲されている。踊りを愛する文化があるバスク地方の出身であるためか、ラヴェルは舞曲ととても深い繋がりがある。

「ラ・ヴァルス」とは英語に訳すと「ザ・ワルツ」の意。ウィーンのワルツの王、ヨハン・シュトラウス2世(1825-1899)への敬意を込めた大ワルツというのが、「ラ・ヴァルス」の最初の構想であった。バレエを念頭に置いて書かれた作品で、19世紀の華やかな舞踏会への想いも感じられる。

ラヴェルはこの作品に次のような説明を添えている。

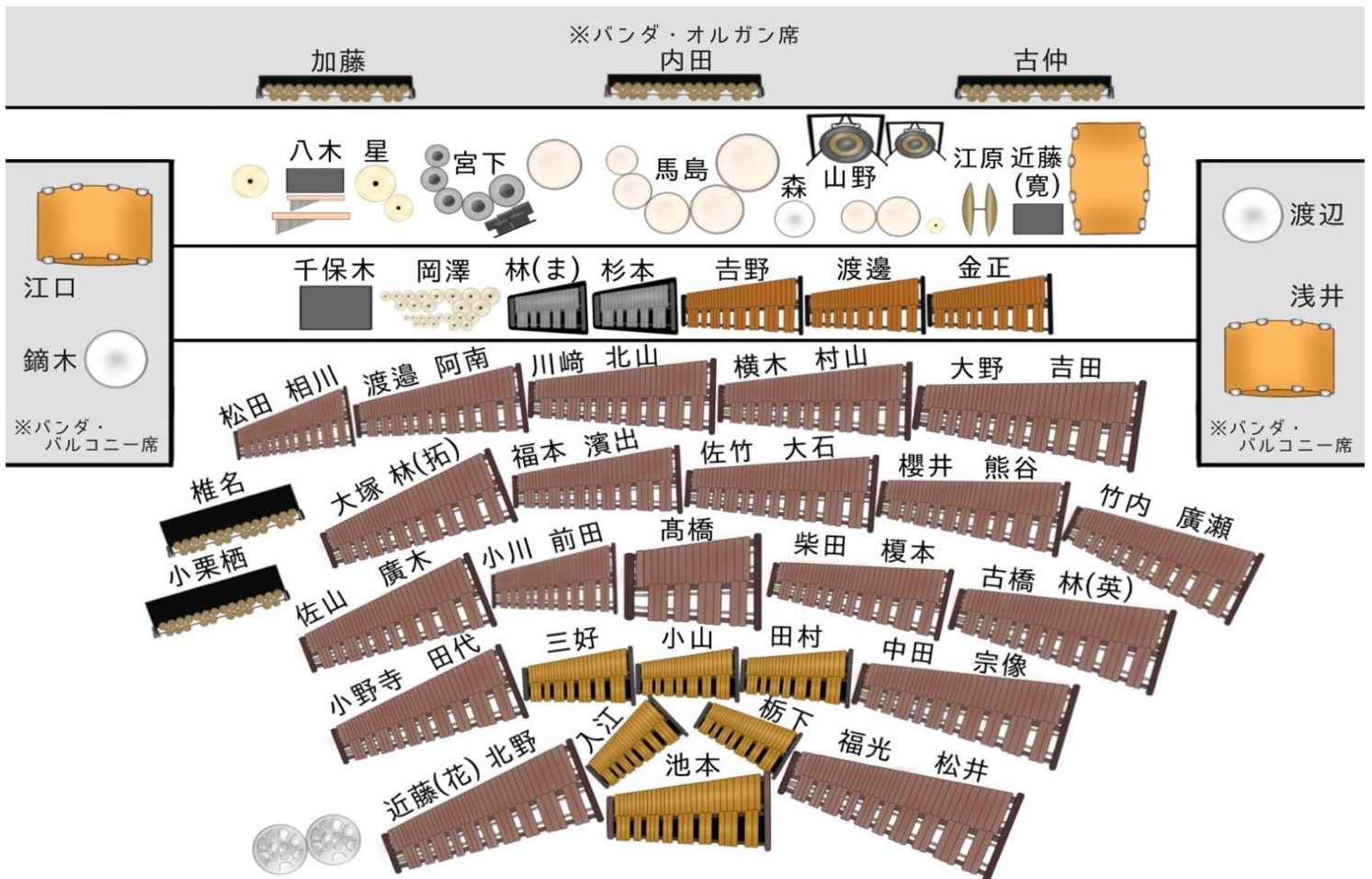
「渦を巻く雲の切れ間からワルツを踊る男女たちがちらちらと垣間見える。雲が少しずつ散っていくとA部で旋回する人々で溢れかえる大広間がはっきりと見えてくる。舞台はだんだん明るくなる。

B部でシャンデリアの光がフォルティッシモでまばゆいばかりに輝く。

1855年頃のオーストリア宮廷が舞台である。

暗雲が少しずつ晴れてくるように、ワルツの響きが遠くから静かに湧き上がり、次第にワルツらしい舞曲が立ち上がる。だが、展開していくにつれワルツが徐々に崩れていき、旋回が最高潮に達したところで叩きつける4連符により破滅的に断ち切られる。

高橋芽生



PROFILE

【指揮】伊藤康英

作曲家。交響詩「ぐるりよざ」、抒情的「祭」などの吹奏楽作品で知られる。また、オペラ「ミスター・シンデレラ」、オペラ「ある水筒の物語」、「貝殻のうた」などの声楽作品、ピアノ連弾曲集「ぐるぐるピアノ」、高校の音楽の教科書の執筆など多分野で活躍。

打楽器作品としては、「バリ島からの幻想曲」シリーズ、「恋人たちのスイーツ」など。

中学、高校の吹奏楽部では打楽器担当。

指揮活動としては、東京佼成ウインドオーケストラ、WASBE 国際ユース・ウインド・オーケストラはじめ、アジアやヨーロッパなどさまざまな吹奏楽団を指揮、ピアニストとしても多くの奏者と共演。

東京藝術大学作曲科および同大学院修了。静岡県音楽コンクール・ピアノ部門優勝。日本音楽コンクール作曲部門入賞。クードヴァン国際吹奏楽コンクール作曲コンクール入賞。浜松ゆかりの音楽家顕彰。日本管打・吹奏楽学会アカデミー賞を二度受賞。

浜松やらまいか大使。「浜松市歌」「伊達市歌」作曲者。

本学教授として教鞭を執り、「グリーン・タイ ウインド・アンサンブル」のバンド・ディレクターを務め、アカデミックかつユニークなコンセプトで話題を呼ぶ。

伊藤作品は、株式会社イトミュージック(発売:ブレイン株式会社)や音楽之友社のほか、アメリカやイギリスで出版されている。

www.itomusic.com



【和太鼓指導】林英哲

佐渡・鬼太鼓座、鼓童の創設に関わり、通算11年間活動。

1982年ソロ活動を開始。初の和太鼓ソリストとして、大太鼓ソロ奏法や太鼓群を用いた独奏法の創作、舞台作品の創作、演出、世界のアーティストやオーケストラとの共演など、ジャンルを超えた前例のない”太鼓音楽“の表現を築く。東京五輪・パラリンピック競技大会組織委員会主催「NIPPON フェスティバル」公式映像での音楽、2020年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」テーマ曲、劇中曲でのソリストとして参加。

1997年芸術選奨文部大臣賞、2001年日本伝統文化振興賞、2017年松尾芸能賞大賞を受賞。

2021年演奏活動50周年、2022年は独奏40周年を迎える。



Photo 富永民生

【ガムラン指導】森重行敏

東京芸術大学音楽学部楽理科卒業。

在学中よりガムラン演奏を始めると同時に、日本音楽についての関心を深める。

桐朋芸術短期大学、東京芸術大学音楽環境創造科などで日本音楽の概論や理論の授業を担当。ガムラングループ「ランバンサリ」および「パラグナ」にて

インドネシア・ガムラン音楽の演奏を続ける。洗足学園音楽大学、尚美学園大学、日本電子専門学校講師。



第42回打楽器アンサンブル定期演奏会 出演メンバー

4年生



3年生



2年生



1年生

